

# 探訪 北の風景 80

## 十勝川と千代田新水路 十勝管内幕別町

青木和弘

十勝川の中流域、幕別町側に掘削された千代田新水路に架かる橋と「魚道観察室ととろーど」の建屋である。9月、10月には十勝川を遡上してきたサケなどが泳ぐ様子を川底からのように眺めることができる。十勝川と共に生きてきた先住のアイヌ民族にとって、サケは厳しい冬を乗りきる命の糧であった。ここにもサケと共に暮らした人々の長い歴史がある。

十勝平野に豊かな実りをもたらす十勝川は、和人が入植した明治中期以降、何度も氾濫して開拓者を苦しめてきた。治水が進み広い湿地は肥沃な畑へ変貌を遂げたのだが、予期せぬ豪雨被害は絶えない。



十勝川の中流域に千代田堰堤（えんてい）が造られたのは1935（昭和10）年。灌漑用水の需要に応えるため、その後の増築工事で堰（せき）は二段になり、魚道が設置されている。

かつて千代田堰堤の池田町側で、遡上するサケを捕獲する地引き網漁が行われていた。養殖に使う卵を採るためだ。近くで見学できたので秋には観光客が押し寄せていた。現在は堰堤の中州側で、川に沈めた「たも網」をクレーンで引き上げて捕獲している。

千代田新水路が完成したのは2007（平成19）年。普段は本流に水を流し十勝エコロジーパークなど観光資源や周辺環境、サケ・マス増殖事業の保護などを図る。一方、川の増水時には分流堰を開いて流量を調整、氾濫を回避する。

幕別町には十勝川にまつわる物語がある。その一つが「武山市街と川舟」の話だ。帯広しんきん郷土文庫の『十勝人 心の旅 3』が取り上げている。幕別町開拓功労者の武山士平は1890（明治23）年、十勝原野開拓のため止若（やむわつか）現幕別町）に入植した。水害や野火など度重なる苦難を乗り越え開拓を成し遂げ、入植者の土地や住居の世話などで人望を集めていた。

まだ十勝原野に道路がない時代、十勝川の川舟が、人と物資の唯一の輸送手段だった。1890年代から始まった幹線道路の建設や、1896年の植民区画地の貸付開始で、入植者が十勝に押し



左側が本流で中州を挟んで右側が千代田新水路。手前に分流堰がある。新水路と中州の間に全長1300m、幅30mの世界最大級の実験水路があり、疑似洪水を発生させる実験などが行われている＝帯広開発建設部ホームページより

かけ物資輸送が増大した。士平は、止若と対岸の利別（としべつ）現池田町）を結ぶ渡船の経営も手がけた。止若は十勝川と猿別川の合流地点で、上流は、水深が浅く大型船は運航できないため、止若が小舟や馬などに荷を積み替える中継拠点になったのだ。

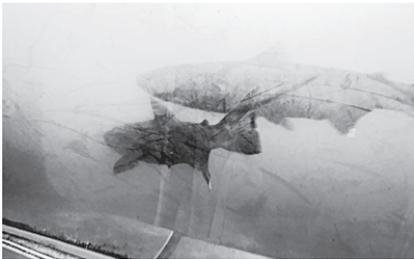
多くの入植者は苦難に見舞われた。開拓しやすい平坦な低地で開墾を始めたが、入植間もない1898（明治31）年の秋、長雨で十勝川や支流が氾濫し、畑や住宅が収穫間近の作物もろとも、あつという間に流されてしまった。

士平は数隻の丸木舟を出して逃げ遅れた被災者の救出にあたりと共に、道路が貫通した自分の土地を宅地に区画し、路頭に迷った入植者1戸あた



千代田新水路に架かる橋は中州まで。中州の下流側から対岸の池田町の道道73号に出られるが、一般車両は通航できない。写真左の建物が「魚道観察室ととろーど」で、秋には魚道を遡上するサケなどを見ることができる

サケと手前の小さい方がカラフトマスだろうとのこと。9〜10月の14〜15時ごろの遡上が多いという魚道観察室で



千代田堰堤の中州側でクレーンで「たも網」を揚げるサケ・マス漁が行われていた

り120坪（約400平方メートル）を、50戸に無償で分け与えた。  
船着き場の近くに住宅街が出現したため、倉庫や郵便局、駅通や医院もでき、商店も建ち並ぶ市街地になった。人々は土平の徳を称え「武山市街」と呼ぶようになったという。しかし、1905（明治38）年に鉄道の止若駅（現幕別駅）が開業してから輸送は鉄道に移り川舟は廃れてゆく。止若の中心地も駅周辺になった。  
かつての船着き場は、十勝川と猿別川の合流点付近で、武山市街は現在の遠別川鮭捕獲場から南へ200メートル辺りの道路沿いだ。いまは畑で当時の面影を残すものは見あたらない。土平の墓は同鮭捕獲場から東側100メートルほどの木々に囲まれた草地にある。